

ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス 『婚約書簡』 について (三)

—— 精神分析の胎動 ——

金 関 猛

家族の肖像

若いフロイトは確かにエキセントリックな人物であった。激情に駆られて愛する恋人に乱暴な手紙を書いている、すぐまたそれを悔いるということが繰り返された。周囲には自ら「敵」⁽¹⁾と呼ぶ同僚もおり、誰とでも愛想よく親しく付き合う社交的な男ではなかった。とりわけユダヤ人差別という不正義には敏感で、それに対しては、暴力で応じる覚悟さえ固めることもあった。こうした面を強調すれば、思い込みの激しい、粗暴で偏屈な人間だという印象が深まるだろう。しかし、フロイトにはまた別の面もあった。友人は多くいたし、すべての同僚を敵に回していたわけではない。年配の教授に研究業績を高く評価され、また人間的にも信頼されていた。そして、『婚約書簡』にはおびただしい数の人々が—その名前が—現れる。家族、親戚、友人、同僚、友人の友人—。当たり前の生活をする者が、これほど多数の人々とかかわりをもつものなのかと訝られるほどにその数は多い。このことからフロイトが、そしてまたマルタも内向的な人嫌いというタイプではなかったことがわかる。家族への思い遣りもあった。本稿では、こうし

た多面的な人間関係における、当時のフロイトの状況について考察するために、まずフロイト、マルタの家族を紹介する。『婚約書簡』からは、これまでの伝記では知ることのできなかった家族の肖像を読み解くことができる。

一、フロイト家の人々

フロイトの父ヤークوپ（一八一五年—一八九六年）は三度結婚し、二人の妻と死別していた。最初の妻ザリー（生没年不詳）とのあいだに二人の息子エマーヌエルとフィリップをもうけた。二人の息子は一八五九年にイギリスに移住し、マンチェスターで暮らしていた。二人目の妻レベカ（一八二〇年—⁽³⁾）とのあいだに子どもはなかった。そして、フロイトとその弟妹は三人目の妻アマリーエ（一八三五年—一九三〇年）の子どもである。長男フロイトが生まれたとき父は四〇歳、母は一九歳だった。そののち二人のあいだには七人の子どもが生まれた。

フロイトには次の五人の妹がいた。

アンナ（一八五八年～一九五五年）

レギーネ、愛称ローザ（一八六〇年～一九四二年）

マリア、愛称ミッツィ（一八六一年～一九四二年）

アドルフイーネ、愛称ドルフィ（一八六二年～一九四三年）

パウリーネ、愛称パウリイ（一八六四年～一九四二年）

二人の弟のうち、一八五七年生まれのユーリウスは翌年一歳で死亡した。もう一人の弟は末子の

アレクサンダー、愛称シャニー（一八六六年～一九四三年）

である。まず、両親について述べる。

①父ヤーコプ

一八八二年の九月末まで、フロイトはヤーコプ・フロイトの名が印刷された便箋を使っている。父の名はそのたびに現れる。しかし、八二年八月に病院の住み込みとなってから両親と同居はしておらず、それほど頻繁に父のことが話題にされるわけではない。とはいえ、父について語られるとき、その内容は深刻である。

ヤーコプは毛織物を扱う商人だった。フロイトが生まれたときにはメーレン（モラヴィア）のフライベルクに居住していたが、一八六〇年からはウィーンで暮らしていた。毛織物商人とはいっても、具体的にどのような商売をしていたのか、どれほどの収入があったのかは明らかになっていない。豊かではなかったのは確かだ。しかし、ともかく長男を大学に進学させ、後述のとおり、長女は師範学校、末子の弟もギムナジウムに通わせていたのだから、それなりの経済力はあったの

だろう。あるいは、無理をしても持てる財産を子どもへの教育につき込んでいたと言うべきかもしれない。『婚約書簡』からは、フロイト家が経済的にそうとうきびしい環境にあったことが読み取れる。そんななかでもたまには家族の楽しみはあった。八二年八月一四日付で、フロイトはマルタに「我が老家長」(Bb.1. S.283)が自分たちをプラターに招いてくれたと書き送っている。遊園地の飲食店で団欒のひとつきを過ごしたのである。フロイトはこう述べる。

あまりに不機嫌なときは別ですが、僕ら若い者と比べても、父がいちばんの楽道家です。でも、残念ながら不機嫌になることがしばしばです。(Ebd.)

父は「楽天」的で、精力的な商人だった。そして、六〇歳代後半になっても気力は衰えず、始終、商用で旅に出ていた。八三年七月七日付でフロイトは、ブカレスト生まれの「ごっこ」(Bb.1. S.506) モーリツ・フロイト（一八五六年～一九二〇年）と昼食をとともにしたと書いている。モーリツの報告によると、旅の途中でフロイトの父に会ったという。そして、父はモーリツの「仲介で数百グルデンを稼いだ」、そして「オデッサに向かっている」(Ebd.) ということだった。これについてフロイトは「うれしい報せ」(Ebd.) だと喜んでる。同月一九日付の手紙によると、父はもうオデッサからウィーンに帰っていた。そして、息子に会いに来たというのだが、それは、すぐまた数ヶ月の長旅に出るので、別れを告げるためだった (Bb.2. S.40)。今回はロシアへの旅だった。そして、それから一月ほど経った八月一八日付の手紙でフロイトは、前日にウィーンに帰ってきた父に会ったと報告する。父は「意気盛ん」

(Bb2 S150) で、すぐまたイギリスに発つのだという。父は、ハンブルク経由でイギリスに渡り、マルタにも会うというのだが、これは実現しなかった。父はパリに立ち寄った後、イギリスに向かった。パリのサン＝ジェルマンに娘のミッツイがいて、子守女として働いていたのである。イギリスに渡った父はマンチェスターで息子のエマーヌエルやフィリップと商売の相談をしたのだろう。その後、一〇月に父はイギリスからウィーンに戻ってきた。フロイトは八三年一月一日付でこう書いている。

金策はぜんぜんうまくいっていません。「父の」ロシアとイギリスへの旅は、予想どおり、空振りに終わりました。(Bb2 S390)

老人は何とか商売を軌道に乗せようと奮闘していた。しかし、成果はなかった。八三年一月二五日付でフロイトは「父はすっかり無口になってしまいました」(Bb2 S449)と嘆いている。しかし、それでもまだあきらめきつてはいなかった。翌八四年一月一〇日付でフロイトは通りで父に出会ったと書き、父は「いまだにプロジェクトで頭がいっぱいで、まだ希望を捨てていない」(Bb3 S56)と述べている。それに対してマルタは「お父様のくじけることのない粘り強さ」(Bb3 S65)に驚嘆している(八四年一月二三日付)。くじけはしなかったにせよ、家計は行き詰まっていた。新たな商売を始めるための資金も底をついていた。同月一四日付で、フロイトははじめての往診の報酬として「五フロリン」(「＝グレン」)(Bb3 S66)をもらい、そのうちのいくらかを父に渡したと書いている。また、八四年一月二五日付の手紙にはエマーヌエルが父への援助——「一〇ポンド」(Bb3 S98)——を

申し出てきたと記されている。さらに、同年六月八日付では父に二グルデンの小遣いを渡したと報告する。八月一八日付でマルタは「お父様は今はずいぶん稼いでおられないの？」(Bb3 S533)と尋ねているが、実際、この頃に父はもはや無収入になっていたと考えられる。父はもう六九歳になろうとしていた(一二月一八日生)。一家は息子たちに頼らねばならなかった。しかし、研修医のフロイトにも十分な経済力はなく、自分の生活費をまかなうのもおぼつかなかった。フロイト家は生きていくのが精一杯という状況だった。

フロイトは、八四年三月二五日付で父に老人性痴呆が始まったのではないかと心配しているが、どうもそれは杞憂だったようだ。同年八月一五日付では「やせ衰えてはいるが、それでも泰然としています」(Bb3 S529)と書いている。生来の楽天性が父を支えていた。しかし、マルタが書くように(八四年六月八日付)「お父様が若返ることはなく、仕事をする力が増すこともない」(Bb3 S396)というのが現実だった。

②母アマーリエ

フロイトの長男マルティンは、祖母アマーリエについて「活気あふれる、いたって気の短い人だった。生きることへの執着が強く、不撓不屈の精神を持っていた」⁽⁶⁾と述べている。また、ジョーンズの想い出によると、避暑地のイシユルでアマーリエは「お年を召したご婦人たちがとつくにベッドに入っているような時刻にカードゲームに興じていた」⁽⁷⁾という。ジョーンズは別のエピソードも引き合いに出して、老いてもなお矍鑠としたアマーリエを描き出す。実際、亡くなったのは

一九三〇年、享年九五であったので、確かに生への執着が強かったと言えるだろう。しかし、『婚約書簡』に現れるのは、マルティンやジョーンズが書き表すのとはそうとうに異なるアマリーエである。

書簡集で最初に母のことが書かれているのは、一八八二年六月二九日付の手紙である。妹のローザ（レギーネ）が「数日後に田舎の母のところへ行く」（*Bb.1. S.129*）とこう。その数日後の七月四日付ではフロイトも「メードリングの母、パウリイ、ローザ」（*Bb.1. S.151*）を訪ねたと書いている。母は娘とともにウィーン南方の街メードリングで避暑をしていたのである。この頃はまだ幾分か経済的な余裕があったのだろう。父ヤーコプのイギリス商用旅行のちにフロイト家が経済的にすっかり行き詰まるのは八三年秋であり、メードリングでの避暑はその一年以上前のことである。しかし、物見遊山で田舎に出かけていたのではない。この頃、アマリーエの体調は思わしくなかった。さらに、その翌年、八三年八月末に父がイギリスへ向けて旅立ったのちの九月九日付でフロイトはこう報告する。

母がきのう病気で熱を出しました。以前、広範囲にひろがっていた肺病がまた少しぶり返したのです。（*Bb.2. S.224*）

母はウィーンの暑気には耐えきれなかった。八三年夏、この手紙が書かれる前に、母はメーレンのロッツナウ（現在のチェコのロジノフ）に滞在していた。母に同行したローザからマルタが受け取った手紙によると「とても元気にしています」（*Bb.2. S.84*）とこういってだったが（八三年六月一九日付）、ウィーンに戻ってから、右の引用のように、また体調を崩したのである。このときは大事には至らなかった。しかし、そ

の翌年の八四年五月七日付で、フロイトはその前日に「五月六日、つまりフロイトの二八歳の誕生日に――ケーキをもってやってきた母についてこう書く。

母はひどく調子が悪そうで、やせ衰え、力がなく、咳をして、汗をかいています。だから、夏にはどうしても田舎で過ごすつもりです。そして、僕らにとつてもっとましなときが来るまで、もう少し長生きしてくれなければ困ります。（*Bb.3. S.316*）

避暑に行ってもらうには、先立つものを工面せねばならない。父にもはや収入はなかった。フロイトはそれから一週間ほど経った五月一四日付で、「フライシユルがたぶん生徒を一人斡旋してくれるでしょう。五〇から六〇グルデンは払ってくれます。そうすればその金で母を田舎へ行かせることにします」（*Bb.3. S.316*）と書く。ウィーン大学医学部の先輩フライシユルの紹介で、医学生に個人教授をし、その謝礼を受け取るというのである。それから四日後の手紙でも「母のために金があるのです」（*Bb.3. S.346*）と書いている。そして、五月二三日付で「今から母のところへ行かねばなりません。今日は生徒が払ってくれた二〇グルデンをもって行くことがいよいよ」（*Bb.3. S.360*）と喜んでいいる。二日後の手紙では「母はもう木曜日に出かけます」（*Bb.3. S.362*）と書く。その後、五月二九日木曜日の手紙には「母はきのうの午前中に出かけました」（*Bb.3. S.374*）とあるので、水曜日にもうロッツナウに旅立ったのである。一安心ではあるが、転地だけで病気は直らない。それから一月ほど経って、ロッツナウのアマリーエから手紙を受け取ったマルタは、「お母様はまだよくなっています」（*Bb.3. S.425*）

とフロイトに伝えている（八四年六月二七日付）。その年、母は約三ヶ月ロツナウに逗留した。ウィーンに帰ってきたのは、八月一八日だった（Bb.3. S.532）。翌日、訪ねてきた母に会ったフロイトは、「元氣いっばこの様子です」（Bb.3. S.534）と喜んでゐる。一二週間ほどの保養で母は本来の「活気あふれる」姿を取り戻していた。

マルティンの言う「いたって気の短い」という性格に起因したのかもしれない出来事がフロイトの手紙でほのめかされている。母がマルタから手紙をもらって、とても喜んでいと伝えたのち、フロイトはこんなことを書く（一八八三年八月二二日）。

君があつた三月二日に僕の実家で起きたことを忘れて、僕の母と仲よくしてくれていることはとても立派だと思つています。（Bb.2. S.159）

詳しいことはわからないが、書簡集の編者が注で述べるように（Bb.2. S.160）、母がマルタを傷つけるようなことが起きたのである。その日付まで覚えていてことさら話題にするのだから、かなり深刻なことだったのだろう。マルタの傷が癒えたのかどうかはわからない。しかし、フロイトの書くようにマルタが、アマーリエと「仲よくして」いたことは確かだ。体調がよくなないと聞くと、それを気遣う手紙をフロイトに送り、また、未来の姑とも手紙のやりとりをし、贈り物の交換をすることもあった。ロツナウのアマーリエと文通していたマルタが、息子から手紙が来ないものだから「お母様は怒つていらつしやる」、「せめて葉書くらいはお書きなやう」（Bb.3. S.425）とフロイトをたしなめることもあった（一八八四年六月二七日付）。母としては、もともと勝

ち気な人であつたし、愛息を奪う若い女性に心底から好意は抱けなかつただろうと想像はできる。しかし、幸いなことに婚約中は物理的な距離が二人を隔てていた。

③二人の異母兄

異母兄についてはすでに触れた。エマーヌエルはフロイトより二三歳、フィリップは二〇歳年上で、兄たちがイギリスへ移住したのはフロイトが三歳の年だった。その後、エマーヌエルが自分の息子ヨーンを連れてウィーンを訪れたことがあつた。『夢解釈』によれば、フロイトが一四歳のときのことだった。フロイトはヨーンとシラーの『群盗』の一場面を演じたという。⁽⁹⁾そして、一八七五年の夏に一九歳のフロイトはイギリスを訪れ、二人の兄と再会した。はじめて訪れたこの国をフロイトはとても気に入っていた。このときのこと『夢解釈』に記されている。そのときアイリッシュ海の海辺で「もちろん」夢中になつて潮に取り残された海生動物を捕まえた⁽¹⁰⁾という。「もちろん」と強調されるのは、この頃、ウィーン大学生フロイトが医学部で海洋生物の神経系の研究に取り組んでいたからだ。しかし、そのことは『夢解釈』では説明されていない。こうした説明の省略がこの著作の独特な文体の一要素となる。それはともあれ、フロイトのイギリスびいきは終生続き、次男にはオリヴァー・クロムウェルにちなんでオリヴァーと名づけ、そして自らはロンドンで没した。

すでに述べたとおり、⁽¹¹⁾一八八三年一月にフロイトは二人の兄とライプツィヒで落ち合い、兄とともにドレーズデンを訪れた。そのとき、

フロイトにザクセンで会おうという誘いの手紙を書いたのはエマーヌエルである (Bb.2 S.474)。フロイトが親しみを感じていたのも明らかにエマーヌエルのほうだった。エマーヌエルとはずっと手紙のやりとりをしていた。フロイトはマルタにもエマーヌエル宛の手紙を書かせ、それを同封して二人の写真をマンチェスターに送っている (Bb.1 S.398)。またこの兄については「素晴らしい人です。イギリスのジェントルマンの落ち着きと威厳、そしてユダヤ人の内面性を併せ持っています」 (Bb.2 S.488) と高く評価する。ライプツィヒで兄に再会したときのことを報告する手紙 (八三年二月二〇日付) でもエマーヌエルとは「きのう別れたばかり」 (Bb.2 S.513) であるかのような気がしたと記している。さらに続けてこう書く。

僕らの間柄がどれほど親密であったか、それは僕が君の手紙の一通ほとんど全部を読んで聞かせたということからもわかってくれるでしょう。そんなことをしたのはエマーヌエルに対してだけなのです。 (Bb.2 S.513f)

つまり、フィーリップにはそんなことはしなかったのである。それどころか「フィーリップの姿や振る舞いにはとてもいやな思」 (Bb.2 S.512) をしたという。

軽薄で弱々しく、耳が遠く、生きる喜びはなく、あまり道理も弁えず、始終、病気のことばかりを嘆き、そして細々したことにまだけち臭このです。 (Bb.2 S.513)

二人の兄に対する態度は対照的だ。じつはエマーヌエルも「少し顔つきが乱れ、ちょっとやせ衰えていて、いくらか神経過敏」 (Ebd.) だっ

た。しかし、次兄に対するような不快感は感じていない。同じ身内としては、フィーリップに同情してもよいはずだが、次兄には嫌悪しかない。おそらく誰でも不愉快な印象をもつような人物だったのだろう。しかし、同時にフィーリップへの嫌悪にはフロイトの無意識がかかわっていたのかもしれない。

『夢解釈』で自分の夢を分析するなかで、ある一連の複数の夢の基盤をなすのが、自分の「子守女の想い出」であると分析している。

それは、いつからかははっきりとしないが、二歳半までの乳児期に私の世話をしてくれた人で、私には意識中にほんやりとした想い出も残っている。最近、私が母から得た情報では、その子守女は年をとった醜い人で、しかし、とても賢くて働き者であったという。¹³

子守女について、フロイトは自分が「教育者であったこの人を愛していたとたぶん考えてよいだろう」¹⁴とも述べている。フロイトが「母から得た情報」については、フリース宛の手紙 (一八九七年一〇月一五日付) で語られている。この女はフロイト家で盗みを働いていたことが発覚し、一〇ヶ月の刑を受けたのだという。母によると、巡査を呼びに行ったのはフィーリップだった。フロイトはフリース宛の手紙で、その頃の想い出を検証しながら、自分はフィーリップから「子守女は牢屋に入れられた」というようなことを聞いたのだろうと推測している。¹⁵「愛していた」子守女が姿を消したとフィーリップとは無意識の連想において結びついていた。次兄への嫌悪の背後にはこうした過去があった。

④ 妹たちと弟

長妹のアンナはマルタの兄エーリと結婚して、一八九二年にアメリカに移住し、ニューヨークで没した。それ以外の四人の妹（ローザ、マリア、アドルフイーネ、パウリーネ）はヒトラー・ドイツによるオーストリア併合後もウィーンに残り、強制収容所に連行され、そこで殺害された（アドルフイーネはテレージェンシュタットで餓死）。末弟のアレクサンダーは、一九三八年にカナダに逃れ、同地で病没した。

『夢解釈』で幼児の両親との関係を論じ、オイディプスに言及する前に、フロイトは兄弟姉妹の関係について考察する。そのなかにフロイト自身の体験に基づくと思われる記述がある。先述のとおり、すぐ下の弟ユリウスは一八五七年に生まれ、翌年四月に死んだ。それは、フロイトがようやく二歳になろうとするときだった。そして、妹アンナが生まれたのはその年の一二月である。『夢解釈』では最初に生まれた子は両親の愛を独占するが、やがて弟や妹にその愛を奪われて嫉妬するという事態について論じられる。嫉妬に駆られた子は弟や妹がいなくなってしまうばよいと願うという。そして、フロイトはこう書く

実際に赤ん坊の弟や妹がほどなくふたたび消え去ってしまうこともある。そうするとその子はまたも家族のあらゆる情愛を一身に集めるようになる。ところが今また新しい子がコウノトリに運ばれてくるとする。そのとき我らが愛し子の内で、新たな競争相手も前の子と同じ運命をたどればよいという欲望が生じるのももつともなことではないか。そうなれば、あの子が生まれる前のように、また今度の子が生まれるまでのように自分がいい思いができるよ

うになるからだ¹⁶⁾。

ユリウスが消え去り、フロイトは家族の情愛を取り返す。しかし、それもつかの間、アンナが生まれ、特権的な地位はまたも篡奪される。こうしたいきさつはそののちも無意識的にこの妹との関係に影響を及ぼしたにちがいない。先述の子守女の一件が起きたのも、フロイトが「二歳半の頃」というのだから、ちょうど妹が生まれる頃だった。フロイトは一八八四年一月一日付のマルタ宛の手紙でアンナを「好きになつたことは一度もありません」(Bb.3. S.58)と断言するのである。

右のフロイトの言葉は、マルタがアンナからもらった手紙について書いたことへの反応だった。マルタはアンナからの手紙について「気分が悪くなるほど装飾過剰で、文体面でも、正書法の面でも間違いがいくつもあって、これで『資格試験合格済』の先生なのかと」(Bb.3. S.47)疑ってしまったという。実際アンナは教員として勤めていたのである (Bb.3. S.388)。また別の手紙でも、アンナから「恐ろしく愚かしい手紙」(Bb.3. S.254)を受け取ったと書いている。マルタが人を悪く言うことは滅多にないので、実際、アンナには何か特異なところがあったのだろう。そうした特異性はもしかすると二歳半年上の兄との軋轢のなかで形成されたのかもしれない。こうしたことに加えて、アンナがフロイトの嫌悪するエーリと婚約、結婚したことで、フロイトとの関係はさらにこじれてしまう。しかし、これについてはのちに述べることにしたい。

先に引いた八四年一月一日付の手紙でフロイトは、アンナへの悪口に続けて、次女ローザとは「隔つてのなご」(Bb.3. S.58) 仲だと書いて

いる。マルタもまた八二年七月四日付の手紙で、フロイトの妹たちのなかで「いちばんの信頼」(Bb1. S147)を置きそうなのはローザだと述べている。実際、ローザ宛のフロイトの手紙(八二年七月二八日付)

によると、フロイトが最初にマルタとの秘密の婚約のことを打ち明けたのがこの妹だった(Bb1. S543)。また、八三年七月九日付のフロイトの手紙によると、この頃にローザはブルスト(一八五五年〜一九二三年)という法律家と婚約したらしい。しかし、ブルストはあまり誠実な男性ではなかったようで、結局この関係は翌年五月に破綻する。その前後のマルタ宛の手紙からは、フロイトがローザのことを親身になって思い遣っていることが読み取れる。ブルストに結婚の意思はないとローザに告げねばならなかったのはフロイトだった。フロイトはブルストから手紙を受け取っていたのである(八四年五月七日付)。そして、兄として「むずかしい一仕事をやりおさせた」(Bb3. S345)とこのことを八四年五月一日付の手紙でマルタに書き送っている。ローザは確かにそのことは了解した。しかし、納得したわけではない。フロイトはこのような妹の態度について「わかってるし、認めているにもかかわらず、それでもまだ彼のことをとても愛しているというのはおかしなことです」(Ebd.)と書き、さらに「マルティ、女性は皆そんなもんですか」(Ebd.)と問いかける。それに対してマルタは五月二〇日付で「ほんとうに可哀想なローザ、どれほど気の毒な思いがするか、言い表すこともできません」(Bb3. S352)と同情する。そして「あなたが思うように愛がそんなに早く醒めてしまはずがないじゃないの」(Ebd.)とフロイトをたしなめている。女心の洞察において、どうもマ

ルタのほうが未来の精神分析家より一枚上手であったようだ。フロイトが「リビドーの粘性性」という術語を使い出すのは、それから三〇年以上のちのことである。

三女のミツィ(マリア)は、ある期間フランスで住み込みの子守をしていた。一八八三年六月二六日付の手紙でマルタは「きのうサン＝ジェルマンのミツィから心のこもった手紙をもらいました」(Bb1. S462)と書いている。いつ、どういう経緯でパリに移り住むことになったのかは明らかではない。八二年八月二八日付のフロイトの手紙からは、このときにミツィがまだ両親のもとにいたことが読み取れる。そして、その次にミツィの名が現れるのが右のマルタの手紙である。マルタは、八二年九月から翌年六月までいったん母とともにウィーンに戻り、フロイトとも頻繁に会っていた。そのため、さすがにこの間の文通は間遠になっており、この一〇ヶ月のことについては不詳な点が多い。ミツィはその間に「おそらく兄とその婚約者にも見送られてサン＝ジェルマンに発ったのである。その後、体調を崩したように、父がパリに向かった。父がハンブルクではなく、パリ経由でイギリスに向かったのは、ミツィの病気のせいでもあった。九月三〇日付のフロイトの手紙によると、ミツィは父に会い、「元氣は回復しましたが、でもひどいホームシックになってる」(Bb2. 295)ということである。マルタの八四年五月九日付の手紙には、サン＝ジェルマンのミツィが「とてもうまくいっていて、フランをたっぷり稼いでいる」(Bb3. S322)と伝えてきたと記されている。しかし、ミツィがパリで子守をしていたのは、そもそもフロイト家に経済的な余裕がなかつ

たからだ。結婚前の女性が自ら進んで職業に就く時代ではない。八四年五月一八日付で、フロイトは「ミッツィが母に二〇〇フランを送つてきました」(Bb.3. S.346)と書いている。フロイト家の人々は、フロイト自身も含め、経済的にぎりぎりの状態で生活していた。フロイトは一八八四年八月一九日付で「ミッツィから哀れな手紙が何通か来ています。あの子も帰ってこなくてはなりません」(Bb.3. S.534)と書いている。好き好んで異国で子守をしていたのではない。マルタ宛の手紙よりは、兄への手紙が本音なのだろう。一八八三年一月二七日付の手紙では、モーリツ・フロイトとの婚約が報告されている。モーリツは、フロイトの父に儲け口を仲介した、先述の遠縁の男である。しかし、モーリツにも十分な経済力はなく、結婚は一八八七年まで待たねばならなかった。

一八八三年九月九日付の手紙で、フロイトは「ドルフィとベッツラインスドルフに遠足に出かけました」(Bb.2. S.224)と報告し「ドルフィ(アドルフ・フィーネ)が「妹たちのなかでいちばんかわいくて好ましい」(Bb.2. S.225)と書いている。また、八四年六月八日付でも「ドルフィはいつも変わらず気立がよさ」(Bb.3. S.383)と記している。ローザについては「隔てのなご」仲だと言うのに対して、ドルフィについては「いちばんかわいい」とまで言うので、やはりこの妹がフロイトのお気に入りだったようだ。八三年一月一日付でフロイトは、ドルフィが「半日の仕事を探している」(Bb.2. S.390)と書いている。知り合いの女性が「週一二フローリン」(Ebd.)で菓子屋の売り子の勤め口を斡旋してきたが、自分分は「大反対」(Ebd.)だという。フロイトはこの仕事口の一件を半年

以上経ってまた話題にしている(八四年六月一七日付)。しかし、ドルフィが手紙でマルタに伝えたところでは、結局この話はうまくいかなかった(八四年七月一八日付のマルタの手紙)。マルタが書くように、それはドルフィの「生活のための戦い」(Bb.2. S.396)だった。マルタは、ドルフィにはそのための「武装」(Ebd.)がまだできていないと書く。ハンブルクではそうした仕事をするのにも「実業学校を卒業していなければならぬ」(Ebd.)というのである。フロイト家には、長女以外の娘にそうした「武装」をさせるだけの余裕はなかった。

ドルフィと一番下の妹パウリイ(パウリーネ)のことを、フロイトはしばしばまとめて「おちびたち(die Kleinen)」と呼んでいる(一八八二年七月八日付等)。八三年七月一八日付では「二匹の若猫」(Bb.2. S.34)とも書いている。ドルフィとは六歳、パウリイとは八歳違いだった。二人とも兄にすれば小娘だったのだろうが、とくにパウリイのほうは幼く思えたようだ。一八八二年八月三日付で「もう一八歳になるというのにまったく『純粹理論』のまま、高収入の若い男が優しくしてくれば、それでもう上出来だと思っている」(Bb.1. S.248)と書いている。ところが、それから一年半ほど経った八四年四月二一日の手紙には、「おちびのパウリイがもう幸せな恋に落ちている」(Bb.3. S.279)と書き記す。相手は二八歳の法律家だった。これについて、マルタは『おちび』なんていう形容詞を使うのはもうあまり適切とは言えないでしょう」と論じたうえで、「若いパウリイのことはそんなに驚きませんでした」(Bb.3. S.285)と書いている。二人の関係が長続きすることを心から願っているとも書くのだが、交際はすぐに終わった。この一件の

後にも、フロイトは八四年六月八日付で「何があったのかはわからな
いが」「パウリイはとても子どもっぽい」(Bb.3. S.393)と書いている。
それは末娘にはありがちなことかもしれない。

パウリイのことを「子どもっぽい」と書いたのに続けて、フロイト
は弟アレクサンダーについて「才能がなさ過ぎるのか、不真面目すぎ
るのか、どちらかのせいで身を立てることができない」(Ebd.)と嘆い
ている。弟とは一〇歳も離れているのだから、もはやライバルではあ
りえない。むしろ、兄というよりは父のように、あるいは、まさに歳
の離れた兄として弟を見ていたのである。この手紙に限らず、弟につ
いてあまりよくは書いていない。しかし、とくに仲が悪いというわけ
ではなさそうだ。『夢解釈』の「革命の夢」の分析では、弟のことが想
起されている。その夢の前日、アレクサンダーからイタリア旅行に誘
われたというのである。しかし、兄はそれを断った。それ以前にいっしょ
に旅行して弟から文句を言われていたからだ。

私が一日であまりに多くの名所を回ろうとして、あちこち駆け回
ろうと弟に強いるので、いっしょに旅行すると私のせいでくたく
たになる。「中略」というのである。²⁰⁾

このときは断ったのだが、それ以前には兄弟で旅行していたのであ
り、また、弟は文句を言いつつも、兄を旅に誘うのだから、仲はよかつ
たのである。マルタ宛の手紙でよくは書いていないのも、この頃のアレ
クサンダーが、進路が定まらず、ふらふらとしていたからだ。兄は
それを心配していたのである。アレクサンダーは兄と同じレオポルト
シユタットのギムナジウムに通っていたが、成績は芳しくなく、五年

目に中退した。その後、八二年八月から交通機関(列車、蒸気船等)
の時刻表を出版する仕事の見習いを始めた。その上司となったのはエー
リ・ベルナイスだった。エーリの口利きによる勤務だったのである。
ところが、フロイトは一八八二年一〇月二五日付で、エーリの母エメ
リーネ——つまり、マルタの母——に手紙を書き送り(『婚約書簡』第一卷
所収)、弟の退職を知らせる手紙を書き送っている(Bb.1. S.546ff)。勤
務とは言っても見習いで、給与も支払われなかった。そうした待遇に
本人も、また家族も不満だったのである。母エメリーネへの手紙では、
エーリへの恩義は感じているが、やはりこの待遇で続けさせるわけに
はいかないので、どうか了解していただきたいということが慇懃な調
子でしたためられている。そんな手紙をわざわざ母に送ったのは、ベ
ルナイス家との関係の悪化、あるいは断絶を恐れたからだ。それは、
マルタとの婚約がまだ秘密にされていた時期だった。そして、この頃
にはエーリとの仲もすでにこじれていた。

その直後のアレクサンダーの動向ははっきりとは読み取れない。
八三年一月三日付でマルタは「シャニー」「アレクサンダー」はどう
していますか。商売のこつを身につけようという勉強は進んでいる
の?」(Bb.2. S.394)と尋ねているが、それに対する答えはない。何か
見習いの仕事をしていたのだろうか。それから三ヶ月ほど経った八四年
二月二〇日付の手紙で、フロイトは弟が転職したと知らせている。知
人の経営する工場で働き出したという。うまくいきそうもないが、弟
は「いまだに甘やかされているので、「きついことに慣れたほうがよい」
(Bb.3. S.158)と書いている。さらに、同年五月二三日付でフロイトが

弟には「今月、稼ぎがなかった」と書くのに対し、マルタは六月一日付で「シャニーは今のところは無職なの。」(Bb.3. S.399)と尋ねる。六月一二日付の返事で、フロイトは弟が「ちゃんとした文章の書き方と速記」(Bb.3. S.401)を勉強していて、自分が弟を経済的に扶助していると答えている。先に弟が「身を立てることができない」と嘆く手紙を引用したが、それを書いたのがちょうどこの頃である。フロイトは弟をくさしながらも、その将来を案じ、生きる術が身につくよう援助していた。その甲斐もあってか、のちにアレクサンダーはウィーン商科大学の教授にまで出世した。兄とはまったくタイプは違うが、弟なりのペースで自分の才能をしいに発揮できるようになったのである。²³

先述のエメリーネ・ベルナイス宛の手紙でフロイトはアレクサンダーの件については、本来ならば父からお知らせすべきなのは承知している書き、さらにこう続けている。

父は老人です。そして、その双肩には多くの、とても多くの厄介事がのしかかっております。そのため、どうしても父でなければならぬことは除いて、私が引き受けるようにしています。(Bb.1. S.548)

父は一八八二年で六七歳だった。当時の常識では確かに「老人」であったが、末子はまだ一六歳でさまざまの助力を必要としていた。父がこの時点でどのように、またどれほどの収入を得ていたのかは定かではない。ともあれ、それは一家を養うのに十分な収入ではなかった。だからこそ、娘たちも仕事に出て、「生活のための戦い」を強いられたの

である。その頃の兄フロイトにも一家を経済的に支えるだけの力はなかった。しかしまた、兄として弟妹のことを思い遣り、父親代わりをしようとしていたのも確かだ。妹アンナについては「好きになったことは一度もありません」と書くのだが、この妹をまったく無関心に無視していたこともたぶん一度もなかったのである。

二、マルタの家族

①エーリ・ベルナイス

すでに述べたように、最初にマルタ、ミンナ姉妹とフロイト家の姉妹とのあいだに交際があり、そして、フロイト家を訪れたマルタをフロイトが見初めたのである。妹たちの交際が、兄の婚約、結婚に結びついたのと同時に、それはまたマルタの兄エーリとフロイトの妹アンナの婚約、結婚に繋がった。フロイト家とベルナイス家には家族ぐるみの交流があった。

フロイトはエーリを嫌悪し、やがて悪態をつく手紙を頻繁にマルタに送るようになる。しかし、知り合った当初から嫌っていたわけではない。七月一日付の手紙には「エーリとは心のこもった付き合いをします」(Bb.1. S.140)と書かれている。ただし、そこにはすでに「ある種の気兼ね」(Ebd.)がないわけではないという留保がついている。また、八二年七月一三日付の手紙では、エーリはもう「身内」(Bb.1. S.197)の者となっているので、「もともとの善良で高貴な性質」(Ebd.)を見てとることができるとまで書いている。エーリはその頃毎晩フロイト家を訪れていたのである。²⁴ところが、同年八月一日付ではマルタにこ

んな報告をする。

まだ君のいるときにエーリはまずミッツィと付き合ったかと思うとやめてしまい、それから君がいなくなった後でアンナの頭をおかしくしました。でも残念ながらこれはたいしたことではありません。「中略」そして、あからさまに軽蔑するような態度でアンナには背を向け、今は技法に則ったやり方でパウリイのご機嫌をとっています。(Bb.I. S247)

この時点でも、フロイトは妹たちに手を出そうとするエーリに対して、それほど感情的になっていくわけではない。むしろ、怒ったのはマルタのほうだ。これに対する返事(八月五日)にはこう書かれている。

エーリについての話は本気にしなくてよいとおっしゃいますけど、とんでもありません。ほんとうにひどすぎるわ。私が思うに、良心的な兄としてあなたがなすべきことはただ一つ、エーリをとつとと放り出すことです。(Bb.I. S250)

この手紙への返事(八月八日付)でフロイトは、心配することはない、放り出すようなことをするまでもなく、パウリイに悪さはさせないといったことを書いています。

フロイトは婚約者の兄に当初は好意はもっていたのだろうが、その一方で婚約から一週間も経たない六月二三日には「エーリにおもねるのではなく、勝手なことをさせないようにせねばならぬ」(Bb.I. S103)と書く。エーリを褒め称えるのは婚約者の兄だから、というのがおもしろい理由だったのだろう。「心のこもった付き合ひ」をしていると書いたことは忘れ去られ、しだいに悪意が目立つようになる。

ベルナイス家は子どもたちが成人する前に父が亡くなり、家族は貧窮していた。ジークムント・パッペンハイムが子どもたちの後見人になったとはいえ、兄としてエーリは妹たちに、また息子として母に責任を感じる立場にあった。フロイトとマルタの交際が始まった頃、エーリはまだ二二歳だった。しかし、その歳でエーリには「家長²⁴」として振る舞うことが求められていた。もともと利かん気で強引なところがあったのかもしれないが、むしろそうした態度をとらざるをえないという面もあっただろう。八二年七月四日付の手紙でフロイトは、エーリが酒席で「約束の言葉に満ちた、まじめくさった基本政策演説」を行い、その演説で「家をまるで国家のように扱って」(Bb.I. S152)いたと書く。もちろんエーリはその長たらしとしていたのである。フロイトは誇張しているのだろうが、エーリにはこうした傾向はあったのだろう。そして、それはまた彼にとつての必然でもあった。

そうした事情はフロイトにもわかっていたはずだ。しかし、フロイトはそんなことには頓着しない。フロイトがエーリのことを悪し様に言うようになるのは、マルタのエーリに対する態度、あるいはフロイトがそうだと思ひ込んだマルタのエーリに対する態度のせいだった。

マルタは八二年の夏を母とともにハンブルクのヴァンツベークで過ごす。九月にいったんウィーンに戻り、翌年の六月まで滞在する。その間、マルタは母、兄妹と同居していた。前述のとおり、その間も文通は間遠ではあっても継続はする。フロイトは妹たちから家でのマルタの様子を聞いたという(八二年一〇月一九日付)。

家で君は「人」にどうしても必要とされている。「人」は君に英語

を習わせようとしなさい、たぶん教科書代を惜んでいるのだ。「人」は君を迎えにいくと言って、僕にはエスコートさせようとしなさい。僕のマルトヒエン「マルタの愛称」はそういうことすべてに甘んじていて、それどころか、それはもう変えられないと思ひ込んでくる。(Bb.I. S.378)

訳文中の「人」は、原語では不定代名詞の *man* で、それに引用符がつけられている。これはもちろんエーリへのあてこすりである。さらにこの手紙では「エーリは君の思っているような善良な若者ではなく、まったく低俗な奴なのです」(Bb.I. S.379)と罵っている。三ヶ月前に「善良で高貴な性質」と褒めていたことは忘れてしまったようだ。これに対する返事でマルタは、自分が家で「灰かぶり姫の役目」(Bb.I. S.381)に甘んじているなど言いがかりだと憤慨する。「そんな考えはあなたの頭の中にこびりついているだけ」(Ebd.)と云うのである。しかし、さらにフロイトは一〇月二二日付で、「君はエーリの家庭内女奴隷です。彼が『合図する』だけで、君は震え上がります」(Bb.I. S.383)とまで書く。結局、フロイトが気に入らないのは、マルタがエーリを家長と認め、それに付き従っていること、あるいは、そんなふうに見えたことだった。フロイトは兄にすら嫉妬していたのである。それとともに、マルタがエーリに従うのは、ベルナイス家という名家の一員たらしめするためだとの思い込みもあった。エーリには確かに傲慢で独りよがりな面もあったのだろう。しかし、異常なほどにその傾向が激しいわけではなかった。これ以降もフロイトがエーリを嫌い、悪罵を書き続けるのは、おもにフロイトの独占欲のせいであり、また、名門一族に

対する反発のせいでもあったと考えられる。

② ミンナ・ベルナイス

フロイトがマルタを見初めたとき(一八八二年の春頃²⁵)、その場には妹ミンナがいた。たまたま同伴していたのではない。二人は仲がよく、いっしょにすることが多かった。そのときマルタは二〇歳、ミンナは一六歳だった(一八六五年六月一八日生)。そして、姉よりも早くミンナはすでに婚約していた。現在よりも婚期は早かったとはいえ、一六歳での婚約²⁶は当時でも一般的とは言えない。ミンナの婚約も秘密にされていた。婚約の相手は二一歳のシェーンベルク(一八六〇年四月七日生)だった。シェーンベルクは当時まだ学生で、ウィーン大学でインド学を学んでいた。結婚して一家を構える用意などなく、そのうえ結核に罹っていた。こんな状況で早すぎる婚約をしたのは、むしろ夭折の予感があったからかもしれない。その頃、ミンナもまた結核を病んでいたのである。実際、シェーンベルクは、ミンナと結婚することなく、一八八六年一月二九日に二五歳で死去する。それに対し、ミンナが没したのは一九四一年二月二二日で、享年七五。生涯独身で、一八九六年からはベルクガッセのフロイト家に同居していた。訪れる客人の相手をする才女であり、甥や姪たちに慕われるミンナ叔母さんだった。

フロイトは一八八二年六月一九日付のマルタ宛の手紙で、「ミンナがシェーンベルクを通じて心のこもった挨拶を送ってくれました」(Bb.I. S.94)と書いている。フロイトとマルタの秘密の婚約はその二日前のこ

とだった。ミンナがフロイトに告げたのはそれについての「心のこもった挨拶」であった。ミンナとシェーンベルクは最初からその秘密を共有していたのである。マルタとミンナのあいだに隠し事はありえなかった。ヒルシユミュラーが述べるように「マルタにとってミンナは親密で、かけがえのない友人」であるとともに、「気むずかしい母親と諍いが起きたときの同盟者」でもあった。

フロイト、マルタの往復書簡では、頻繁にミンナのことが話題になっている。また、フロイト宛のマルタの手紙に、ミンナの手紙が同封されることもあった。さらには、フロイトとミンナも手紙のやりとりをしていた。二人の手紙は往復書簡集として刊行されている。書簡集の冒頭に収められているのは、一八八二年八月二日に書かれたミンナ宛のフロイトの手紙、最後の手紙は一九三八年六月二日付のフロイトのミンナ宛である。最初の手紙ではまだ敬称(Sie)が用いられているが、内容は内密な事柄であった。

僕がヴァンツベークからマルタが戻ってくるのを待ち焦がれていることは、だいたいご存じでしょう。でも、今日エーリが九月一日に彼の地に向かうという報せを受け取りました。一週間滞在して、そしてその後、マルタといっしょに帰ってくるという事です。

「中略」エーリの旅が僕にとつて何を意味するかはすぐわかります。まず、マルタの不在がもう二週間引き延ばされるといふことです。

マルタがヴァンツベークから戻ってくるのは、当初は八月下旬の予定だった。それが遅れるというのである。これに続けて、エーリがヴァンツベークに行けば、もしかすると自分がひそかにマルタを訪ねたこ

とが露見するかもしれないなどということが書き連ねられている。この手紙を受け取るミンナはこのときまだ一七歳で、フロイトが「おちび」と呼ぶ妹パウリィよりもさらに一歳若かったのである。そのミンナにフロイトは対等の大人に対するように一大人げない内容の手紙を書く。マルタとミンナは姉妹として互いに信頼し合い、そして、フロイトも婚約者の妹に揺るがぬ信頼を寄せていた。フロイトにとって、ミンナは自分とマルタを仲介するための「もつとも近しい人」であった。その反面、フロイトは、自分とマルタ、シェーンベルクとミンナの四人についてこんなことを書いている（一八八三年一月二七日付マルタ宛）。

僕はいつもこんなふうに思っています。僕らのうちの二人は心善良なる人たちです。それは君とシェーンベルクです。そして、乱暴で、それほど善良ではないのがミンナと僕です。二人は順応的で、後の二人は意志的であろうとします。だから、僕らは似てない者同士でうまくいくのだし、ミンナと僕は同類なのでとくにうまくはいきません。そしてただだからこそ二人の心善良なる者たちは互いに魅力を感じないのです。(Bb2 S541)

ミンナがフロイトほどに「乱暴(wild)」であったとは思えない。しかし、マルタに比べればそうした傾向があったのだろう。実際、マルタも、ミンナは自分より気性が「ずっと激しく」(Bb1 S295)と書いている。(八二年八月一八日)。また、「順応的」、「意志的」という対照は、おもにエーリに対する態度を基準にした区別だった。フロイトに対してマルタは十分に「意志的」であったと思うが、フロイトのを見るとこ

ろ、「家長」エーリにはあまりに従順だったのである。エーリ自身がフロイトに打ち明けたところでは（八二年七月一日）、「ママとミンナはぜんぜん家事をしない。マルタがやってきてはじめて家がなごむ」(Bb1. S140) のだった。反面、マルタは自分には「ミンナのような美しい文體」(Bb1. S470) で手紙は書けないと嘆いており（八三年六月二八日付）、ミンナは文章のうまい理知的な女性でもあった。ミンナはさまざまな面で姉ほどには「女らしく」はなかった。そして、同性の似ていない者同士—フロイトとシェーンベルク、マルタとミンナ—も仲よくできたのである。

③ エメリーネ・ベルナイス

マルタの母エメリーネが寡婦となったのは、四九歳の年だった。頼れる親戚は兄のエリアス・フィーリップ（一八二四年—一八九八年）しかいなかった。七人の子を産んだが、そのうち成人したのは三人だけだった。また、二度にわたる夫の経済的な破綻、さらに夫の投獄まで体験したのだから、苦勞の多い人生だったと言わざるをえない。高い教養を身につけ、読書家で、英語とフランス語を話すことができた。フロイトも、エメリーネについて「詩人や文芸作品がとてもお好きなんだね」(Bb1. S136) と書いている（一八八二年六月三〇日付）。そうした面では、フロイトの母と対照的だが、強い個性をもち、そして、長男と長女が婚約した頃、病気がちだったという点は共通していた。

『婚約書簡』でエメリーネは「ママ」として頻繁に話題になっている。それは、マルタが母と同居していて、とりわけ母の病氣のことを手紙

に書き記したからであり、フロイトがエメリーネへの反感を頻々と書きつけたからだ。しかし、エーリに対するのと同じく、最初から反発していたわけではない。少なくとも初対面の印象は上々だった（八二年八月二九日付）。

君の母君ははつらつとしていて、華やいていて、見ているだけで元気になります。(Bb1. S332)

このときエメリーネはウィーンに戻っていて、マルタはハンブルクに一人で残っていたのである。二人のはじめての出会いについてマルタはミンナからも手紙で知らされていた。ミンナによれば、フロイトは母に「最高の印象」(Bb1. S338) を刻んだという（八二年九月一日付）。また、その一週間後には、母自身からもフロイトに「感激している」(Bb1. S345) 旨の手紙がマルタに送られてきたという（八二年九月八日付）。しかし、この時点でエメリーネには二人の婚約のことは知らされていなかった。娘の未来の夫としてフロイトに「感激」していたのではない。この点についてフロイトはこう書いている（八二年八月二九日付）。

僕らの関係をお母様に秘密にしておくことはむしろかしくなるでしょう。お母様は僕らがこれまで思っていた以上に感じていらっしやるのだと確信しています。僕らに反対なさることはないでしょう。でも、そのことは言わないでおきたいという理由が君にあるのなら、それはそのまま納得します。(Bb1. S332)

婚約を秘密にしようとしたのはマルタで、このときフロイトはそんなことは無用だと感じていたのである。ところがそれから一週間ほど経った九月六日付の手紙では、エメリーネと「ずっと近い付き合い」

(Bb.I. S344) をするようになったと書き、そして、もうこの手紙でエメリーネについてネガティブなことを書き始めている。「慇懃無礼」で、「ちやほやされる」(Ebd.) ことばかりを望む女性なのだという。さらに、婚約を秘密にしておくことに関しては、秘匿もいたしかたないが、その理由だけは言っただけという意味のことを述べている。結局、いつまでも秘しておくわけにはいかず、婚約から半年後の一八八二年二月二六日に母親にも告げられ、それはいわば公のこととなった(一八八三年二月二四日付のマルタの手紙参照)。しかし、マルタが秘密にしておきたかった理由は、少なくとも手紙の中では明かされていない。

二人の手紙からはいくつかの理由が推定できる。まず、エメリーネがマルタを必要とし、手放そうとしなかったために、あるいは、マルタが母についてそのように感じていたせいで、結婚のことは切り出せなかったということが考えられる。先述のとおり、エーリによれば、「ママとミンナはぜんぜん家事をしない。マルタがやってきてはじめて家がなごむ」のである。八四年四月一六日付でマルタは母親について「数年前に心膜炎に罹った」(Bb.3. S269) と書いている。どんな容体であったのか、具体的には記されていない。しかし、心臓病という診断なのだから、深刻な事態だったのだろうと想像できる。フロイトの第一印象にもかかわらず、実際、エメリーネはずっと病気がちだった。熱や頭痛のせいで伏せているという記述は、マルタの手紙に頻繁に見られる。また、八四年三月からは、フロイトがマルタからの手紙に基づいて「急性皮膚炎」(Bb.3. S228) と診断する症状に一ヶ月ほど苦

しんでいた。そのあいだ母の世話をしていたのはもちろんマルタだった。母はマルタに頼り切っていた。マルタはそんな病気がちの母を見捨てることはできないと感じていて、婚約のことは言い出せなかったのだろうと推定できる。婚約相手が誰であれ、母にそのことを打ち明けるのはむずかしかったのだろう。

別の理由として、相手がまさにフロイトだったから、ということが考えられる。エメリーネは零落したとは言え、良家の婦人としてのたしなみとプライドを身にまとった女性だった。そうした点でフロイトの母とは対照的であり、またフロイト自身、そうしたご婦人を相手に社交的な振る舞いをすることはできなかった。そのことはエーリがフロイトに面と向かって言い放ったことでもある。エーリによれば、フロイトには「ご婦人と付き合う作法が欠けている」(Bb.I. S197) のだった。エメリーネにとってはそうした「作法」がごく当たり前の生活の空気だった。フロイトは、やがて開業医としてウィーンの上流階級の女性たちを患者として診療していくなかで、そうしたたしなみを学んでいく。しかし、それは一〇年以上のちのことだ。マルタと知り合った頃のフロイトは、洗練された社交的なたしなみとは無縁の男だった。

さらに宗教への姿勢もまったく異なっていた。エメリーネは敬虔なユダヤ教徒だった。シナゴグに通い、ユダヤ教の戒律を遵守していた。たとえば、ハムを食べてはならなかった。しかし、無宗教者、あるいは反宗教者のフロイトにとって、それは蒙昧的で、健康を害する迷信でしかなかった。フロイトはマルタにぜひハムを食べるように強く勧める、あるいは強要する。マルタはそれに従い、またエメリーネもそ

れを黙認はする。³²⁾しかし、母としてはもちろん心穏やかではなかっただろう。マルタは、信仰という点からしても、母がフロイトとうまくやっていけるはずはないと思い、それが婚約を秘密にした一つの理由となつたと推測できる。

エメリーネの性格をうまく表すエピソードがある。一八八四年七月二〇日付の手紙で―つまり、二人がウィーンとハンブルクに離ればなれになって一年以上経って―マルタは「こんなふうになっていることで、私たちがどんな目に遭っているのか、ママはどうもはじめて気がついた」(Bb.3. S.470) ようだと書いている。きっかけはマルタがフロイトからの手紙を読んで、恋しさのあまり泣き出してしまったのを母が見たことだった。これに対してフロイトは七月二三日付で、これだけ時間が経つてようやくそこに思い当たるなんてどうかしていると憤慨しているが、それは確かにもつともなことだ。やはり自己中心的で、他者を気遣う繊細さの欠如する人だったのだろう。しかし、フロイトも、エメリーネがマルタの母であることまで否定するわけにはいかない。それだけに、フロイトは苛立ちを募らせるのである。

フロイトとエメリーネの関係についてもさらに述べるべきことはある。それについては稿をあらためることとし、ここでは、以上をもつて両家の人々の紹介とする。

なお、本研究は科研費25370086の助成を受けたものです。

注

(1) ノートナーゲル教授の助手ヤクシュ(一八五五年―一九四七年)をフロイトは「僕

の敵」(Bb.1. S.396, S.430)「僕の敵対者」(Bb.1. S.403)と呼んでいる。

(2) 本稿執筆の時点での*Brautbriefe*は全五巻のうち第三巻までしか刊行されていない。そのため、ここでは「当時」とは一八八二年六月から一八八四年八月までに限定せざるをえない。婚約時代全体の俯瞰はできないが、のちに加筆することを期して、本稿では第三巻までで明らかにしうることを記述する。

(3) レベカについては、一八五二年から五年のあいだに死去した³³⁾しか明らかになっていない(Elisabeth Roudinesco, Michel Plon, *Wörterbuch der Psychoanalyse*, Springer, Wien 2004, S. 298)。

(4) この手紙では「いとこ」(Cousin)と書かれているが、編者注によるとGroßcousin (Bb.1. S. 472)で、正確には「またいとこ」³⁴⁾、あるいは「遠い親戚」である。

(5) 『婚約書簡』の編者によれば、一〇ポンドは一〇〇グルデンに相当する (Bb.3. S.145)。

(6) マルティン・フロイト『父フロイトとその時代』藤川芳朗訳、二〇〇七年、白水社、一一二頁。

(7) Ernest Jones, *Sigmund Freud Life and Work*, vol. 1, The Hogarth Press, London 1953, p. 3.

(8) 金関猛「ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について」(二)、『岡山大学文学部紀要』、第六六号、二〇一六年二月、二頁。

(9) フロイト『夢解釈』(初版)・下、一〇〇頁。

(10) フロイトは一八七五年七月一六日にウィーンを発ってイギリスへ渡り、同年九月七日に戻った(Sigmund Freud, *Jugendbriefe an Eduard Silberstein 1871-1881*, S. Fischer, Frankfurt am Main 1989, S. 138ff.)。

(11) フロイト『夢解釈』(初版)・下、二一〇頁。

(12) 金関猛「ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について」(二)、『二頁。

(13) フロイト『夢解釈』(初版)・上、三二七頁。

(14) 同右。

(15) Sigmund Freud, *Briefe an Wilhelm Fliess*, S. Fischer, Frankfurt am Main 1985, S.291.

(16) フロイト『夢解釈』(初版)・上、三三二頁以下。

- (17) アンナはウィーン的女子師範学校を卒業して来た (Anna Freud-Bernays, *Mein Bruder Sigmund Freud. In: Eine Wienerin in New York. Aufbau Taschenbuch Verlag, Berlin 2006, S. 22f.*)
- (18) 金関猛『ニコトクムメント・フロイト／マルタ・ベルナイス』『婚約書簡』に引く(1)「(岡山大学文学部紀要)」、第六五号、二〇一六年七月、四四頁)で「兄の婚約のことを知らないローザ」と書いていたが、これは誤りである。一八八二年七月にローザはすでに兄の婚約のことを知っていた(一八八二年七月一日付のフロイトの手紙を参照)。この訂正させていた。
- (19) この術語の初出は『精神分析入門講義』(一九一七年)である (Sigmund Freud, *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, G.W., Bd. II, S. 360.*)
- (20) フロイト『夢解釈(初版)・下』、一〇七頁。引用文中の強調はフロイトによる。
- (21) 『婚約書簡』の編集者注(Bb.3, S.159)によれば、マルタの妹ミンナの婚約者の兄ゲーツァ・シェーンベルク(一八五二年～一九二六年)が「庄搾酵母工場主」で、アレクサンダーはその工場で仕事を始めたという。
- (22) フロイトの長男マルティンはこう書いている。
父とアレクサンダー叔父さんほど人生観が違う兄弟も珍しいが、二人はとても仲がよかった。(マルティン・フロイト『父フロイトとその時代』、二四頁)
- (23) 一八八二年六月二三日付(Bb.1, S.103)、同年七月四日付(Bb.1, S.148)参照
- (24) ミンナ・ベルナイス宛の手紙で、フロイトはエーリを「家長(Hausherr)」と呼んでる (Sigmund Freud, Minna Bernays, *Briefwechsel 1882-1938, edition diskord, Tübingen 2005, S.37.*)
- (25) 金関猛『シートクムメント・フロイト／マルタ・ベルナイス』『婚約書簡』について(1)「三七頁以下」。
- (26) ヒルシュミュラーによれば、ミンナは「姉「マルタ」より早く、一七歳で婚約」した(26) (Hirschmüller, *Einführung, In: Sigmund Freud, Minna Bernays, Briefwechsel 1882-1938, edition diskord, Tübingen 2005, S.17.*)。他方、マルタは一八八四年二月一日付の手紙で、「一八日」がミンナとシェーンベルクの婚約記念日だと書いている。一八八二年二月一八日に二人が婚約したとすれば、ミンナ(一八六五年六月一八日生)はそのときまだ一六歳だった。
- (27) Hirschmüller, *Einführung, In: Sigmund Freud, Minna Bernays, Briefwechsel 1882-1938, S.8.*
- (28) Sigmund Freud, Minna Bernays, *Briefwechsel 1882-1938, S.36.*
- (29) Ebd., S.37.
- (30) Hirschmüller, *Zur Familie Bernays, In: Sigmund Freud, Minna Bernays, Briefwechsel 1882-1938, S.33.*
- (31) マルタは一八八二年八月三日の手紙で、婚約をずっと秘密にしておくわけにはいかないが、それを打ち明ければ、「私たちはたぶん戦わねばならないでしょう」(Bb.1, S.251)と書いている。その場合には「ママがいちばん弱い反対者」(Ebd.)で、強硬に反対することはないだろうという。しかし、ではなぜ秘密にしておくなければならないのかは、この文でも明らかにしていない。母はマルタに「おっ」ちばん弱い反対者」であるにしても、ともかく「反対者」なのであり、婚約をすんなり認めてくれるとは思ってはいなかったのである。
- (32) 一八八三年七月八日のマルタのフロイト宛の手紙 (Bb.1, S.507)、同年七月一日付 (Bb.1, S.516)、一八八四年七月一七日 (Bb.3, S.464) のフロイトのマルタ宛の手紙を参照。